

左義長の思ひ出

兒玉 稔

昭和二十七年、余、小學校入學の直前、故ありて余の一家引越しせり。轉居先、今は大都市郊外の住宅地なれども、當時は農村と言ふが相應しき地なりき。そこにて余は他所者の新入學兒童たり。

同地にて初めての正月を終へたる頃、部落の小學生全員十數名に對し下校の後、集合の號令かかりぬ。一年生の余も例外ならざりき。年中行事らしけれども、余は土地を知らざればその主旨わからざりき。未だ親しき友を持たず、やや寂しき日々を送りをれば、仲間外れになるを避けむとして指定の場所に驅付けたり。

集落地には既に、六年生二、三人が下級生に指示を出し居たり。すなわち、一年生より五年生までの兒童一人毎にそれぞれ受持ちの集落を割振り、隈なく一軒づつ訪問すべしと。余以外の子等、慣れたる有様にて、てんでに自分擔當の方角に向け散らばりぬ。

なすべきを知らず呆然と立ち盡くす余に氣づける六年生、多少の説明を致しくれる。各戸の入口に立ち「シャギトノタキモンチョ」と大聲で唱へよとのことなり。この呪文、意味不明なれども、指示に對するに質問を返すは余所者として控ふべしと健気に判断し、また見知らぬ年長者に對する畏怖の念もこれあり、ここは意味わからずとも、そのまま指示の通り動くに如かずと子供心に決心、呪文を口移しに丸暗記す。

割當の農家の戸口に立ち、中の人に届くほどの大聲にて先の呪文を唱ふ。と、家の住人、かねてより承知の如く藁や新聞紙、小枝の束、稀には現金を持ち來りて余に渡す。それらに何の意味やある、は余の關はり知るところにあらず。唯、それを受取り、手に餘る分量になりたらば、街道を歩む六年生の下に運び彼らが引くりヤカーに乗す。彼等は面倒なる戸別訪問をせざりき。これ最上級生に許さるる特權なり。

後日、呪文の意味、明らかになりぬ。「シャギト ノ タキモンチョ」のシヤギトは左義長を言ふ土地の言葉にして、別稱どんど焼き、小正月に門松等を持寄りて燃す行事。タキモンは焚き物、チョは子供言葉にて頂戴なり。即ち、「左義長の行事にて燃すための焚き物を頂戴。」の意と判明す。子供が集めた

る焚き物はその日の夕方、部落の大人が催す左義長行事にて使ふ。余、勿論この日にはそれらを知らざりき。

村落の人々はこの時期に子供來りてシャギト云々を言はば左義長の焚き物と直ちに理解す。故に、余の作業は一應の順調さを得て進行するも、やがて問題出現す。

この地區、殆どが農家なりしかど、次なる訪問先は新築にして、明らかに農家ならざる一軒なり。その玄關口に立ち例の呪文を大聲にて發す。ガラス戸が開き、農家の婦人とは異なる洋装の、若き夫人現る。見知らぬ子供の來訪は豫想外、且つ意味不明の言葉をのみ唱ふる余を、彼女は世にも不思議なるものを見る眼付きにて見、しばし無言。やがて、戸を開けたるまま奥へ戻る。余、他家の對應とは異なるを察知し不安を覺ゆ。

ややありて、その夫らしき人現る。余はこの人にも呪文を唱ふ。彼、同じく意味わからず不審顔。余、半べその状況になれどもなお呪文を言ふ。しばらく無言にて聽きたる彼、余が泣き顔の間近にその顔を寄せ、「汝、日本語を了解すや？」と眞顔にて訊く。この問、當然と言ふべし。三十代らしき男がするその黒縁の眼鏡、今も忘れず。

君、余を責むな、余としても君と同じく、呪文の意味不明なり。余には余の事情ありて君の戸口に立つ。四の五の言はず他家同様に新聞紙などを持ち來れ。日が暮れぬうち疾く、疾く。

余は、かく呪文が通ぜざる事態に對処する策を持たず。呪文の意味を知らざる以上、別の言葉にて彼に説明することあり得べくもなし。ただ懸命に呪文をそのまま言ふのみ。訊かるともなほ訊かるとも、涙頬を傳ふを感ずとも、これを繰返し言ふことの外には思ひ付かざりき。

この新築一家往訪が如何なる決着となりたるかは覺えず。結局、余が何物をも得ずしてその家を後にしたるか、上級生の助力を仰ぎたるか、記憶せず。

幼な心とは言へども、自分すら不理解不納得のことを他人に向けて言ふほかに無き我身の不甲斐なさと悔しさ、その悔しさを克服せざればいつまでも他所者の位置より抜け得ざるを自覺し、懸命に所與の役割を果たさむとするひたむきさ、その場を逃げ出したき気持ちに抗ひ涙を流しつつも「シャギト・シャギト・…」と唱へつづけたること、等は今も悲しく思ひ起こし得る。

何らの收穫無く六年生を落膽せしむる惧れと、「シヤギト・・・」を繰返す他に策を持たぬ心細さには、余の今の心持におきても同情の念を禁ぜず。逃げ出したきを押へて必死に踏みとどまり、泣きつつ自分すら意味不明の呪文を發し續けざるを得ざる己の姿が眼前に浮かび、涙出でむ心地こそすれ。

その後數年を経ずして、子供の焚き物集めは取りやめとなり、やがて左義長行事そのものも行はれざることとなりけり。

當時、日本は未だ貧しく、大人は生きること懸命、社會は今ほど子供に優しからざりき。かの時の余と年頃を同じくする孫とトランプに興じつつ、今の幸せを思ふ。

(令和五年三月二十七日受附)